

「ヤコブよ、あなたを創造された主は、イスラエルよ、あなたを造られた主は、今、こう言われる。恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ(イザヤ 43:1)」。

神は「ヤコブよ」と全部族に呼びかけて、「お前たちは何者か」を告げる。神にとって民とは何者か、人間とは何者か、私たちとは何者なのか。

神に造られた者、神に贖われる者、神に所有される者、神に名を呼ばれる者だ。だから恐れるな(43:1)。いかなる苦難に遭っても、神が共にいて守られる(43:2)。

仏陀は、人生は「諸行無常」で「一切皆苦」だと言い、「生老病死」を冷徹に見つめてのまったき自由で清明な生き方を説いた。ユダヤ・キリスト教徒も同じ人間、生の根本にさして違いはないだろう。

私たちは一切皆苦に対してどう自由でありうるか。その自由のためにも、自分が何者であるかをこの心身で納得したい。

究極的に私たちは、創造された者、贖われて所有されている者。さらに一人ひとりが固有の命として現れるために、創造者である贖い主によって、私の名が呼ばれている者だ(43:1)。

「水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、焼かれず、炎はあなたに燃えつかない(43:2)」。

神に従ったからといって、歩く道が平坦になるわけではない。いやむしろ、逆じゃないか。「神が共におられる」ことを知るキリスト者は、対岸が見えない大河でも、誰もいない炎の中へでも、「恐れず(43:1)」にそこへ導かれていく。

マグダラのマリアは混乱していた(ヨハネ 20:13)。そして復活のイエスが誰か分らず(20:14)、庭師だと勘違いする(20:15)。「死」に捉われ、死にイエスの面影を求めていたからだ。

ところが「イエスが〔マリア〕(20:16)」と名を呼ぶと、彼女は「振り向く(20:16)」。すなわち「方向転換(悔い改め)」をして、「ラボニ(先生)」と応えた(20:16)。マリアの視線は、絶望の「死」から新たな「生」へ転換したのだ。

「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す(10:3)」。キリストは、死に拘泥していたマリアの名を呼んで方向転換させ、新しい復活の命へ招く。すると「羊はその声を知っているので、ついて行く(10:4)」。

マグダラのマリアは、かつて「イエスに七つの悪霊を追い出していただいた婦人(マルコ 16:9)」。それほどがんに縛られていたところを、イエスによって解き放たれた。すなわちその時、ある意味でマリアが創造され、固有の人生が始まった。彼女はそんな創造者から名を呼ばれ(イザヤ 43:1)、泣きやみ、恐れずに(43:1)、その声に応じてついて行った(ヨハネ 10:4)。

それからマリアは、「弟子たちのところへ行って、〔わたしは主を見ました〕と告げ、また、主から言われたことを伝えた(20:18)」。

春先の旬のもの、菜花や薔の薹のほろ苦さが、この身に染みていくのを感じた。ああ確かに人間は自然と共にある(身土不二)。この自然をも創造された主を思い、またコロナウィルスの大流行からも、世界すべての民が現存する唯一の「ヒト科ヒト属ヒト」であることをつくづく省みている。

そんな兄弟が互いに戦争したり、モノやカネを奪い合っている。兄弟なのに、兄弟だから、兄弟ゆえに罪深い。

人々は今、大河で体力を消耗しているが(イザヤ 43:2)、「恐れるな～あなたはわたしのもの、わたしはあなたの名を呼ぶ(43:1)」という主の声を聞く。その声でマリアのように転換するだろうか(ヨハネ 20:16)。



《おまけのひとこと》

いくら目を見開いても暗闇では足許が危険 幽かな灯さえないのだから だったら耳を澄ませよう
闇内に世界が立ち現われる 主の声は つぶやくようで 意味は解らずとも 確実に聞こえている